

今福利恵 提出 学位申請論文（課程博士）

『縄文土器の文様生成構造の研究』 審査要旨

### 論文の内容の要旨

縄文土器の文様における、多様性の要因としての文様構造とその生成過程を解明する。具体的な文様構造の把握は、中部地方の中期土器様式を対象に、範型論を基礎にして変形のあり方を追及する方法をとっている。また各様式の文様構造がどのように様式転換し、変化するのかについて検討する。そして土器様式における文様要素の組合せから遺跡間関係をとらえ、その関係によるネットワークの存在を想定し、社会の解明を試みるものである。

まず第Ⅰ部第1章ではその前提作業として中部地方甲府盆地域の中期土器編年を提示し、これを土器変遷の基軸とする。つまり中期初頭の五領ヶ台式土器を七段階、中期中葉の勝坂式土器は、井戸尻編年に準拠して十二段階、中期後半では甲府盆地域の曾利式土器を十段階とした。

第Ⅱ部第2章で縄文土器の文様生成構造を把握するための理論的枠組みについて範型論を基礎としながら文様要素の関係、不変、変形という視点を示す。そして土器の実体化過程の仮説に基づいて、範型は基底部門でつくられて器形構成規則と文様構成規則から成立するとした。器形構成規則は器形要素の種類とその選択・配列方法を、文様構成規則は文様要素の種類とその選択・配列方法を規定するものであ

る。こうして器形と土器文様のフォーマットにそれぞれ要素が配置されて形成された範型は、ある土器型式の同一性を保障する基底となり、不変の特性をもつ。さらにこの不変の特性をもつ範型から土器がつくられ、その範型から抽出されるさまざまな属性は変形を受けることとなる。器形の実現においては、器形変形規則が作用し、器形要素の配列を変える挿入、削除および器形比率を変える短縮、延伸、拡張が実行される。土器文様は文様要素変形規則と文様要素が配列された文様帯に対しての配列を変える文様帯変形規則が作用する。文様要素変形は、文様要素を付加させる同種結合・異種結合があり、また文様要素のある部分を強調・簡略する。文様帯変形規則は、ある文様帯を省略・削除・重帯などそれ自体に適用する一次変形と、ある文様帯にある文様帯配列をはめ込む代入・結合などの二次変形がある。こうした変形を受けてできた土器の詳細設計図を表層部の土器とし、これを元に土器が製作されたとした。さらに実際の製作にあたり再調整規則がある。このように土器の実体化仮説を重層的に考えることで、不変的な範型をとらえる一方で、変形という概念により多様性が創出されてくるとした。この仮説によって中期土器様式を具体的に検討し、その文様構造をとらえてゆくのである。

第3章は中期初頭の五領ヶ台式土器を検討対象とする。集合沈線文土器と縄文系土器に大別し、それぞれが併存するなかで相互の土器の系統的なつながりや、どのように文様が構成され、展開しているのか、また器形変形について明らかにする。

第4章では、中葉期の勝坂式土器を対象とする。多くの型式が生成

発達するが、様式として成立させている基本文様構成を抽出し、それらがどのような体系によって多くの型式を生成するのか検討する。勝坂式土器の文様構成は、その文様構成の基本は変えておらず、その運用において変形させていくことにより多くの土器型式を出現させていることを明らかにする。しかしこうした複雑な展開も、範型を変形したものである限り、土器様式としての統一性は保持されるというメカニズムを明らかにする。

第5章は、勝坂式土器様式の系譜をひく中期後半の曾利式土器様式の検討を通して、他地域に根拠する加曾利E式土器や大木式土器の具体的な影響をその組成の中に見出す。つまり初期では、勝坂式からつながる各型式で同じ文様構成を示すが、その一つが変化しなくなる。あわせて加曾利Eから導入されたつなぎ弧文土器、やがて大木式土器起源の肥厚帯口縁土器が増加するうちに、在地のx把手土器は継続しながら、外来土器のつなぎ弧文土器が曾利式土器の主要型式となっていく実態を示す。

第6章では火炎土器の起源や系譜が北陸の影響下で成立し、特徴的な把手は東北地方の土器に由来することを明示する。

第7章では、五領ヶ台式土器からの様式転換は、五領ヶ台式土器として安定した文様構成に、別の文様加わる、構造附加による勝坂式土器への転換を明らかにする。

第8章では、勝坂式土器から曾利式土器への変換において、新たな文様帯が一斉に採用されていく、文様構成上の構造附加を契機として新様式が成立しているとする。

第Ⅲ部は、いよいよ縄文社会への接近の実践である。土器文様の体系的な配列規則としての範型論に立脚し、土器文様要素の同定によって、最小限の共通性を見いだすことで遺跡間関係をとらえる。そして第9、10章において勝坂式土器成立期の土器を分析する。つまり文様要素の出現頻度の高い遺跡は多くの土器文様の情報を持ち得る地域的に中心的な遺跡とする一方で出現頻度の低い遺跡は周辺遺跡と区別することを出発点とする。

文様要素の分布における、地域的な偏差が、特定の地域間にものみ限定される場合では、これに含まれる中心遺跡を介しての情報共有関係が存在したものと推定できる。中心遺跡が含まれていない場合は、遺跡相互の関係が希薄と推定できる。この現象を情報の流れとして整理することによって、中心遺跡どうしでの情報の共有関係、中心遺跡と同地域の周辺遺跡との情報共有関係、ある中心遺跡のみで完結、中心遺跡と他地域の周辺遺跡での共有関係を明らかにする。

具体的には土器の文様要素の組合せから浮かび上がってくる遺跡間関係図を作成する。その中で多くの遺跡と関係を持つ中心的な遺跡が型式分布圏におけるネットワークの中心となる構造となるのである。勝坂式土器成立期の中心的な遺跡のネットワークはかなり凝集性が高いものとなっている。この遺跡間関係を通時的にみると、初期は広域的に非常に緊密均等な関係を持っているが、次第にこの関係が変化し、最後には情報に不均衡を生じやすい状況となっていくことを読みとるのである。

第11章は火炎土器を分析する。まず火焰型と王冠型の基本的な文

様帯構成を把握し、文様要素の組合せから遺跡間関係の解明を試みる。中心的な遺跡が信濃川流域などの地理的な分布圏内の各地域に分散する一方で地理的な状況とあわない場合もある、同じ火炎土器様式圏内であってもそれぞれ関係がみられない。また文様要素の分布に遺跡間関係を投影すると、同様な分布状況にありながら、文様帯ごとの配置される場所やその組み合わせの中で文様要素毎に異なったネットワークを反映したものと理解される。文様要素は、地理的な空間を越えて偏った分布を示す場合があるが、これにネットワーク図を重ねることでその要因が複雑であることを示している。それは土器文様の情報は独自の複雑なネットワークを介しているからである。

第12章は曾利式土器成立期を分析対象とする。土器文様を、頸部と胴部の文様帯に区別して検討すると、胴部文様帯にみる関係は各地域ごとに関係が類似しており、隣接する地域との関係をもっているが、頸部文様帯にみる遺跡間関係は八ヶ岳西南麓を中心にしたものであって周辺地域同士の関係はみられない中央集権的な縦社会構造となっている。この要因としては、胴部文様帯が前時期の勝坂式土器からの伝統による可能性があり、一方の頸部文様帯は曾利式土器になって成立したため、新しく作られた関係を反映しているとも考えられる。つまり土器一個体をもつ二つの文様帯は均等な情報ではなく別々の背景を反映していたためと考えられる。

土器文様の型式学的検討から遺跡間関係をみていくことは、土器からその背後にある社会のあり様の一端を推察する道を拓くものとなる。土器文様の持つ属性の組合せは一定の規則性を持つパターンを共

有する。そこには土器製作者の流儀があり、限定された情報の共有は社会性を持っている。この遺跡間関係は、当時の社会において集落間での人の動きを反映し、より具体的な社会像をみせてくれるものへつながっていくと考えるのである。

### 論文審査の結果の要旨

縄文土器は多種多様な情報を内包している。その片鱗は観察によって認知しうるが、それらをただ寄せ集め、並べたててもなんら意味は見えてこない。つまり、不特定多数の眼がいかにとらえようとも、そのままでは情報たりえないのであり、意識的に焦点を絞りこみ、計算づくで抽出し、取捨選択したものが初めて有意の情報となるのである。本論文には情報抽出の方法論が明確に用意され、個々の情報要素との間に介在する関係もまた高次元の情報へと止揚することに成功しており、ここにこそ縄文土器の文様生成構造研究の成果が約束されているのである。

本論の主題に先立って、まず分析対象とすべき中部地方甲府盆地域の中期土器編年を提示する。中期初頭の五領ヶ台式土器を5段階、中期中葉の勝坂土器を12段階、中期後半の曾利式土器を10段階として、それらの時間的空間的位置づけを確かなものとして、論旨展開の基軸に据えるのは妥当である。

文様生成構造の理解は、範型論に則り、文様の要素と要素の関係、不変、変形という概念を用意する。そして土器の実体化過程の仮説を

重ね合わせて範型が基底部門でつくられ、器形構成規則と文様構成規則を区別する。そのうち土器文様には文様要素変形規則としての同種結合・異種結合、強調・簡略があり、さらに一時変形と二次変形がある。変形を受けた土器の詳細設計図を表層部土器とし、さらに実際の製作での再調整規則がある。こうした土器の実体化仮説を重層的に考えることで範型の不変性と範型の変形という概念によって多様性が創出されるとした。まさに縄文土器の肉眼的観察から深く踏み込んで土器様式を構造的に把握することにおいても、論者の優れた視点が良く示されている。

さらに五領ヶ台式土器から勝坂式土器、および勝坂式土器から曾利式土器への転換について、文様構造概念を敷衍しながらもう一つの構造附加の概念によって理解する。

とくに本論が目指すのは、土器文様にみるネットワークの問題であり、土器文様を範型論によってとらえて縄文社会へと迫るのである。範型とは土器文様の配列規則の体系であり、土器相互において同定された文様要素によって最小限の共通性を遺跡間関係に見出すことから出発する。文様要素の出現頻度の高い遺跡は多くの土器文様の情報を持ち得る集落であって、それを地域的に中心的な遺跡とし、一方の出現頻度の低い遺跡を周辺遺跡として二者を区別し、遺跡間関係のあり方を解きほぐしてパターン化する方法をとる。

この伝で勝坂式土器文様、火炎土器文様、曾利式土器文様を分析して具体的に遺跡間関係を明らかにした内容は極めて説得力があり、高く評価される。

勝坂式土器文様においては、文様要素の遺跡分布の地域的偏差に着目し、特定の地域間にのみ限定された情報共有関係の存在を想定する。これに中心遺跡が含まれれば、その中心遺跡を介して安定した情報共有関係が推定され、中心遺跡が含まれていない場合は、相互の関係が希薄と推定するのである。情報の流れに視点をおくと、中心遺跡同志の共有関係、中心遺跡と同地域の周辺遺跡、ある中心遺跡のみで完結、中心遺跡と他地域の周辺遺跡の情報共有関係というパターンを指摘する。

また異なる遺跡の土器個体間で共通した文様要素をもつ場合は、個体間に有意な関係をもつ遺跡間関係を表わすものとみられる。そして多くの遺跡と関係を持つ遺跡が中心的遺跡として型式分布圏における構造的なネットワークが浮かび上がってくるのである。

火炎土器文様では、文様要素の組合せから中心的な遺跡が信濃川流域などいくつかの地域的なまとまりが明らかにされた。その一方で、同じ地域内にあっても相互の関係の見られない場合などもあり、複雑な様相を示している。つまり、中心遺跡と周辺遺跡との関係の要因はさまざまであり、社会的あるいは経済的な意味とは別に土器文様の情報を中心とするネットワークの存在が想定される、という興味深い事実を明らかにしている。

曾利式土器文様にみる遺跡間関係は、頸部文様帯と胴部文様帯が連動することなく、独立的な実態を示すことも明らかにした。つまり、土器を構成する文様帯の背後にある関係が違っており、土器一個体といえども、その文様は均等な情報ではなく別々の社会的背景を反映し

ている可能性を指摘する。

これまでも、土器文様の型式学的検討から遺跡間関係をみる試みはなされてきたが、確固たる理論的な方法に基づくものではなかった。本論は、まさに現時点での研究の一頂点を極めており、今後の発展を十分に期待させるものである。

以上のことから、本論文の提出者今福利恵は、博士（歴史学）の学位を授与される資格を有すると認められる。

平成 22 年 2 月 18 日

主査	國學院大學大学院客員教授	小 林 達 雄	㊞
副査	國 學 院 大 學 准 教 授	谷 口 康 浩	㊞
副査	早 稲 田 大 学 教 授	高 橋 龍三郎	㊞